保育者・小学校教員養成課程における
ピアノ学習の現状と課題（2）
―ピアノ演奏技術の視点から―

Current situation and issues in piano learning of the training courses for elementary school teachers and early childhood education and care teachers (2)
― The point of view of the skill for playing the piano ―

戸　江　真　以・赤　間　健　一
Mai Toe・Kenichi Akama

1．はじめに

ピアノ学習に関する問題は，保育者・小学校教員養成課程において，これまでにあらゆる視点から述べられてきた。萩原（2019，p.1）は，これまでのピアノ学習に関する研究を概観し，養成校におけるピアノ学習の共通の悩みとして，「入学者のピアノ経験について，年々未経験者や経験の浅い学生が増加していること」，「保育現場で活かせるピアノ技術を習得するための時間が物理的に足りないこと」の２点を挙げている。

未経験者への学習支援に関して，吉村他（2015, 2016）は，入学前のピアノ経験が自己効力感に大きな影響を与えており，未経験者は１年間ピアノ経験を積んでも自己効力感が低いままであることを明らかにしたうえで，目標を明らかにすることが学生の取組みを改善するということを実践と調査により明らかにしている。

ピアノ技術の習得に時間が足りないことに関しては，まず，学生がどこでつまずき，困難を感じているのかを把握しておく必要がある。本間他（2018）では，ピアノ初心者がつまずきやすい技術的な問題を弾き歌いと『大学ピアノ教本』[1)]の場合とで調査し，共通の問題として，左手の伴奏に右手がつられてしまうことを指摘している。このことを克服するためには，「裏拍を打てるようにするリズム感覚の養成や，左右の協応動作を身につけるようなメソッドの開発，及び読譜力の向上とその際のパターン認識を促すような教材の開発がこれら諸問題の解決につながると考えられる」（同前書，p.61）と論じている。

前出の萩原（2019，pp. 3-4）は，ピアノの弾き歌いにおいて，学生が難しさを感じたことを「振り返りシート」の記述から調査･分析し，「一つのことだけならうまくいくのに，同時に二つ以上のことを平並行して行うと難しくなる」あるいは「ピアノだけでも難しさを感じているのに，そこへ歌も入れるとなるとさらに難しくなる」という「同時並行作業」をその一つに挙げている。

また，藤原（2018，pp.43-47）は，ピアノ学習において学生が難しいと感じていることを，「音高」に着目して調査・分析し，「読譜（知識）」，「鍵盤座標《鍵盤の》位置」，「指の移動（鍵盤座標の水平方向）」，「打鍵・離鍵（鍵盤材評の垂直方向）」を挙げている。

岸川他（2016）は，学生のピアノ練習における現状と課題をアンケート調査により明らかにしており，「ピアノ練習で苦手に思うこと」を学生に問うたところ，「曲が仕上がるまでに時間がかかる」という項目に高い割合を示し，次いで「指使いがわからない」，「音符が読めない」という結果を示している。読譜や運指の問題を乗り越えて，課題曲を仕上げるのに時間がかかるという学生の悩みは，技術習得のための物理的時間が足りないという養成校の教員の悩みと共通しているこ

とが確認できる。

このように，ピアノ学習において学生が困難に感じていることは，多くの作業を同時に行わなければならないことが第一に考えられる。また，短期間に課題をこなさなければならなく，その困難さからピアノ学習に向かう意欲を失っていくことが推察される。

戸江・赤間（2020a）では，ピアノ学習における学生の動機づけとピアノ学習への取組みとの関連を調査・分析を行った。本稿では，その結果をもとに，ピアノ学習の現状と課題をピアノ演奏技術の視点から明らかにしようとするものである。

２．ピアノ学習における心理的欲求・動機づけの影響

戸江・赤間（2020a）は，動機づけとピアノ学習行動との関連を明らかにする目的で，ピアノの技術を修得することを目的とした授業を受講した，または受講している女子大学生 108 名にピアノ学習についての質問紙調査を行った[2)]。対象者の平均年齢は 19.5（SD=0.51）歳である。なお，対象校では，20 名程度の一斉授業を行っており，クラスは入学時に編成され，ピアノ学習の習熟度別ではない。調査参加者は，大学の授業内においては，１年後期よりピアノ学習を経験しており，調査時は２年前期である。

尺度は，藤田（2010a，2010b）をもとに，自律性支援の認知，心理的欲求，動機づけ尺度をピアノ学習用に作成し，それぞれ５件法で回答を求めた。ピアノ学習行動については，読譜や指使いなどに関して 12 項目を作成し，５件法で回答を求めた。その他，大学入学前のピアノ学習経験や取得を希望する免許・資格，これまでに取り組んだピアノ曲集について回答を求めた。

心理的側面からは，学生間の関係性欲求が高いこと，学生間の自律性支援を認知していないことが明らかとなった。このことから，学生間の関係性欲求が高いことを活かし，自律性支援につなげることを課題としてあげた。

ピアノ学習に関する結果は，未経験群（42 名）と経験群（62 名）とに分け，心理的欲求及び動機づけと指使いを自分で考えること等に関する「指使い」[3)]，楽譜からの情報を読み取る「読譜」[4)]，苦手意識や難しさを感じることなどに関する「不得意」[5)] のピアノ学習項目３つとの因果関係について調査・分析をした[6)]。

未経験群では，統合的調整が「指使い」に負の影響を示しており，同一視的調整が「読譜」に正の影響を示した。

経験群では，非動機づけが「指使い」に負の影響，関係性欲求（学生）が「読譜」に正の影響を，有能感への欲求が「不得意」に負の影響を示した。その結果を未経験群は図１に，経験群は図２に示す。本稿では，この結果を受け，ピアノ学習行動と動機づけの関連をピアノ演奏技術の側面から考察する。

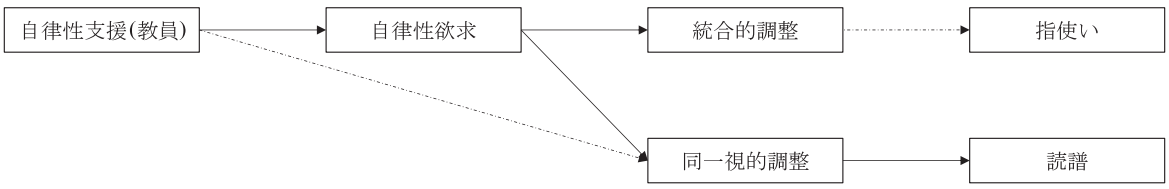

図１　未経験群の心理的欲求，動機づけ，ピアノ学習における因果関係

※戸江・赤間（2020a）を参考に作成。実線は正の影響，点線は負の影響を示す。

※心理的欲求，動機づけ，ピアノ学習に関する項目において，因果関係があるものだけを抜き出した。

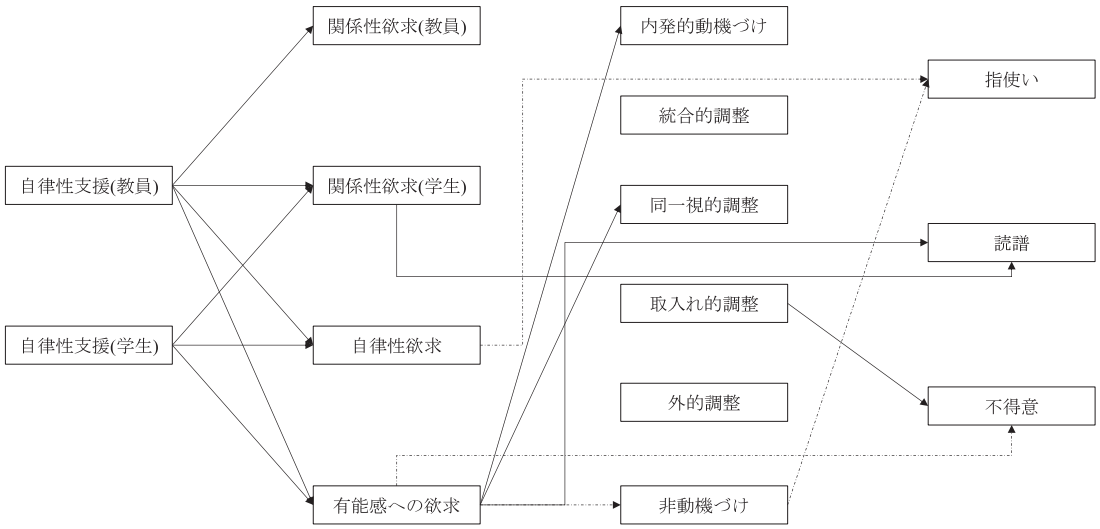

図２　経験群の心理的欲求，動機づけ，ピアノ学習における因果関係
※戸江・赤間（2020a）を参考に作成。実線は正の影響，点線は負の影響を示す。

３．考察

（1）未経験群

まず，未経験群において，統合的調整が「指使い」に負の影響を示したことについて，そもそも統合的調整とは，目的獲得のための手段，ここではピアノを弾くための知識や技能であるが，指使いを自分で考えることがピアノが弾けるようになることに有益でないと認識しているといえる。指使いに関しては，岸川他（2016，p.43）のアンケート調査でも学生の意識について述べられており,「楽譜の指使いを参考にしていますか」という問いに対して，６割以上の学生が「参考にしている，時々している」と答えていることとは裏腹に，先述したように「指使いがわからない」と答えている学生が４割近くいるという結果を示している。本調査においても学生の指使いに対する意識が低いことが明らかとなった。ただ単に指使いを提示するだけでは，学生のピアノ学習に役立っていないといえる。

本研究の調査対象校で使用しているテキストは,『バイエルピアノ教則本』[7]と『こどものうた 200』[8]であるが，後者は指の番号が書かれておらず，ピアノ初学者の多くは指をどのように運べばうまくいくのかが分からず，不自然な指使いで演奏し，そのことがミスの一つの原因となっているといえる。しかし，結果からピアノ学習の浅い学生は，指使いを自分で考えることが必ずしもピアノの技能の向上につながる訳ではないという認識を示していることから，行き当たりばったりの指使いでなく，自分の弾きやすい指使いを考えて練習することがミスの軽減につながり，技能の向上に役立つことを意識づける必要がある。また,『バイエルピアノ教則本』など，指番号が書かれているものに関しては，指使いを守るようにし，そこで学んだ指使いを他の曲でも活用できるように，知識や技能として蓄積していくことができるような指導方法を検討することが求められる。

また，未経験群では同一視的調整が「読譜」に正の影響を示している。これは，ピアノの技能を修得し，維持していくことの意義を認識しているほど，読譜に取り組むという結果である。よって，免許や資格を取るための単位取得のためだけでなく，就職試験や教員採用試験，さらには保育・教育現場に出た際にピアノの技能がどのように活かされるのかを実習期間中のエピソードなどとともに，現実感をもって認識するように促す必要があると考えられる。ピアノの技能は，保育・教育の専門家として一定のレヴェルを現場から求められていることや，子どもの表現活動を豊かに支えるためのツールとなり，保育・教育の質を高める力の一つとなることを継続して説明していくことが重要である。

読譜力を養うには，楽譜を読んで実際の音に変換す

るという経験を根気強く積み重ねていくことが求められ，時間がかかる。ピアノ学習の浅い学生にとっては，読譜は最も労力と時間を要する作業であるともいえる。だからこそ，楽譜から情報を正しく読み取るための，基礎的な楽典の知識を身につけるようにし，それが実際の音楽でどのように表現されているのかを提示しながら指導することが重要であり，学生の読譜に対する苦手意識を軽減させ，自主学習を行いやすくする指導が必要であることが改めて示唆される。

（2）経験群

経験群においては，非動機づけが「指使い」に負の影響を示しているが，これは，ピアノ学習を行うことに価値を見出しておらず，あるいはピアノを弾くことの意義や必要性を感じておらず，ピアノを弾く際に指番号を考えないといった状況を表している。経験群においても，未経験群と同様に指番号を考えることに対してネガティブな結果を得た。ピアノ学習の経験があり，ピアノを弾くことにさほど困難を感じない学生のなかには，指番号を考えなくても運指がうまくいっているケースも見受けられるが，より確実に演奏することを考えれば，やはり指番号を考えて弾くことが望まれる。未経験群と同様，ピアノを楽に弾くため，また，防ぐことのできるミスを回避するために，指番号を考えて弾くことの重要性を伝えていく必要がある。

そして，関係性欲求（学生）が「読譜」に正の影響を示していることについては，学生間の関係性欲求が満たされれば満たされるほど,「読譜」への取組みが促進されることが示唆された。対象校では，ピアノの技能を修得するための授業は，20 名前後の一斉授業の形態をとっており，学生同士が協働的に学ぶには，適した環境であると考える。学生間の関係性欲求に関して，戸江・赤間（2020a）では，分析結果において，学生が関係性欲求（学生）のみを認識し，自律性支援（学生）を認識していなかったことをあげ，関係性欲求（学生）を活かして自律性支援（学生）につなげることを課題としてあげた。中学校の体育授業を調査対象とした藤田（2010a，p.67）によると，生徒が教師とクラスメイトのどちらからも自律性支援を受けていると感じ取れるような授業を行うことで，教師及びクラスメイトに対する関係性への欲求が高まり，自律性欲求が高められると考えられるということである。このような授業を対象校においても展開することで，自律性欲求を充足し，主体的なピアノ学習が促進されることを望むことができる。初めて取り組む曲の読譜は，その学習の初期段階に位置付けられ，労力を要する作業であることは，未経験者と同様である。関係性欲求がピアノ学習の初期段階である「読譜」を促進するというこの結果は，自律性支援（学生）へつなげる一助ともなり，学習支援を考える一つの手がかりとなることが期待される。

また，有能感への欲求が「不得意」に負の影響を示したが，有能感が低いほど苦手意識が強いという当然の結果といえる。ここにおいては，有能感をいかに高めるかが課題となる。有能感を満たす指導として，藤田（同前書）は，有能感への欲求が他の心理的欲求，関係性への欲求（教師），自律性への欲求，関係性への欲求（クラスメイト）と比較して，社会的要因から影響を受けていないことを指摘したうえで,「有能さの感覚を得る機会の少ない生徒に対し，単発的な介入などにより，運動ができた感覚を一時的に経験させるのではなく，長期に渡り実際に運動が上達したこと，熟達したことを繰り返し実感させてあげることが重要になると考えられる」と論じている。経験群でも，ピアノの技能に自信が持てない学生や，苦手意識を持っている学生は存在する。限られた時間のなかではあるが，授業において，ピアノ学習の経験の有無に関わらず,「弾けた」という達成感や成功体験を積み重ねられるような指導を行うことが有益であることが改めて明らかとなった。

おわりに

本稿では，戸江・赤間（2020a）の調査をもとに，動機づけとピアノ学習との関連性を検討した。

自律性支援，心理的欲求，動機づけ，ピアノ学習の４項目における因果関係をもとに，未経験群と経験群に分類して分析した結果，未経験群と経験群とで共通している点と差異がみられた点とがあった。

共通している点としては，指使いの問題である。自然な指使いで弾くことは，ピアノを止まらずに弾くための一つの技術であり，ひいては子どもの歌唱を安定

して支えるために必要不可欠である。「伴奏を弾いている途中に止まってしまう人は，弾くたびに指づかいが変わっていることが多い」（三橋 2015，p.112）と指摘されているように，指使いが音楽の流れを止めてしまう一つの原因となり得るのである。楽譜に書いてある指番号や，教員が提案した指番号で弾くことで，「弾きやすくなった」という実感を積み重ねていくことが未経験群，経験群のどちらにも必要であることが明らかとなった。

顕著な差異がみられた点としては，図１と図２からもわかるように，未経験群はピアノ学習への動機づけの因果関係が少ないのに対し，経験群は，複雑な因果関係を示していることである。特に，未経験群ではピアノ学習と因果関係がある心理的欲求が自律性欲求のみであったのに対し，経験群では，関係性欲求（学生），自律性欲求，有能感への欲求がピアノ学習に影響していることが指摘できる。未経験群においては，技術的な側面のみならず，それぞれの欲求を充足させるような支援が課題である。

本稿では，先行研究でも明らかになっているように，大学前のピアノ学習経験がその後の学習に大きく影響することが改めて確認できたとともに，調査対象校での動機づけとピアノ学習との因果関係からピアノ学習の現状と課題を明らかにした。今後は，本稿で指摘した課題を解決する手立てを検討していきたいと考える。

注

1　大学音楽教育研究グループ（1977）『教職課程のための大学ピアノ教本バイエルとツェルニーによる転回』，教育芸術社。
2　以下，戸江・赤間（2020a）に依拠して論じる。
3　「弾きやすい指使いは，人それぞれであるので，自分で考えた方がよい」，「指使いを自分で考えるのは面倒だ」，「指使いは，教員から指定してくれた方がよい」の３つの質問項目による。
4　「初めて取り組む曲は，必ず調号を確認している」，「初めて弾く曲に取り組むとき，拍子を確認している」，「楽譜を見て自分でリズムを取ることができる」，「調号を見て，何長調かすぐにわかる」の４つの質問項目による。４つ目の質問に関して，調査日までに授業中に扱った曲目がすべて長調であったため，「何長調」という表現を用いた。
5　「＃やｂを見ると，難しい曲に感じる」，「楽譜に『ドレミ』を書き込んでおくと安心する」，「いつも鍵盤を見ながら演奏している」，「初めて取り組む曲は聴いてからでないと，練習する気が起こらない」の４つの質問項目による。
6　詳しい分析方法と結果については，戸江・赤間（2020a）を参照されたい。
7　全音楽譜出版社出版部編（1983）『標準バイエルピアノ教則本』。
8　小林美実編（1975）『こどものうた 200』，チャイルド本社。

引用・参考文献

萩原理恵（2019）「保育者養成におけるピアノ弾き歌いに関する一考察―学生が直面した難しさと授業後の学習に対する意識に着目して―」『幼年教育 WEB ジャーナル』第２号，pp.１- ９。
岸川良子・木村鈴代・中川淳一・吉岡亜砂美（2016）「学生のピアノ練習における現状と課題―アンケート調査結果の分析から―」『福岡こども短期大学研究紀要』第 27 号，pp.41-44。
戸江真以・赤間健一（2020a）「保育者・小学校教員養成課程におけるピアノ学習の現状と課題（１）―動機づけの視点から―」『福岡女学院大学紀要』第 21 号，pp.１- ７。
藤田勉（2010a）「体育授業における動機づけ因果連鎖の検討」『鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編』第 61 巻，pp.47-73。
藤田勉，佐藤善人，森口哲史（2010b）「自己決定理論に基づく運動に対する動機づけの検討」『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』第 61 巻，pp.61-71。
藤原一子（2018）「保育士養成・教員養成課程に在籍する学生がピアノ学習において難しいと感じている項目の分析（１）―ピアノ演奏技術【音高】に着目して―」『東海学園大学教育研究紀要』第２巻，pp.39-49。
本間晶子（2018）「ピアノ初心者がつまずきやすい技術的な問題とその傾向」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』第 67 巻第１号，pp.53-62。
三橋さゆり（2015）「弾き歌いの秘訣（保育者養成者からの提言３）」吉富功修・三村真弓編『改訂３版幼児の音楽教育法』pp.112-113，ふくろう出版。
吉村淳子・芝崎美和（2015）「保育者養成におけるピアノ指導について―学生の自己効力感に着目して―」『新見公

立大学紀要』第 36 巻，pp.59-66。
吉村淳子･芝崎美和（2016）「自己効力感を高めるピアノ指導の検討―目標シート活用の試み―」『新見公立大学紀要』第 37 巻，pp.71-76。